



最優秀賞

書評 佐滝剛弘著『国史大辞典を予約した人々』（勁草書房 2013年）
（中央開架：210/332//H）

文学部3年 三浦直人

朝刊の片隅に小さな広告を見つけた時から、きっとこの本は自分にとって大切な一冊になるだろう、と予感していた。タイトルからして、この本が面白くないはずがない、と。「国史大辞典を作った」でも「改訂した」でもない。辞典を「予約した人々」の物語は、この本を実際に手にする前から、僕の琴線に触れていた、と言える。

『国史大辞典』は、日本史を学ぶ者なら知らぬ者のない、権威ある日本史辞典である。その影響力は、「国史大辞典の一項目は、一本の論文と同様に扱うべし」とおっしゃる先生もいるほどだ。この辞典の初版を予約した、錚々たるメンバーの名簿が見つかった、というところから、物語は紡がれる。

著者はある日、宿泊先の老舗旅館で、一風変わった史料と出会う。「国史大辞典予約者芳名録」である。与謝野晶子、高村光雲、柳田國男……。教科書でお馴染みの名前を目にして、著者はこの史料に包まれた壮大な物語の存在を直感する。ジャーナリストや学者、華族に作家。理系諸学を代表する人々の名も見える。大槻文彦ら、辞書作りのエキスパートが名を連ねているのも面白い。名門校や神社仏閣、変わったところでは警察や監獄まで、挙ってこの辞典を購入している。

予約者は各界の著名人ばかりではない。高額な辞典を手に入れるのは決して簡単ではなかったはずだが、裕福とは言えない一般庶民の名も見える。その意味で芳名録を、「“名士”の総覧だと単純に決めつけること」(p223)は出来ない。そして、むしろこのような無名の人々の物語にこそ、我々は感銘を受けるのである。貧しい患者のために私財をなげうった医者。自分の生活を切り詰めてまで女子教育に尽力した女性。彼らはどんな思いでこの辞典を購入したのか。100年前の小さな物語に、興味は尽きない。

この本の醍醐味は、物語を現代に繋ぐ巧妙な仕掛けである。文中では、予約者ゆかりの事項が、国史大辞典の記述で紹介される。辞典の権威が今も健在であることを、この本の構成自体が物語っている。また著者は、当時購入された辞典がそれぞれ今どうなっているのかを確認している。それによって、「国史大辞典を予約した人々」の物語は、100年前の酔狂な人々の物語ではなく、現代に繋がる物語となる。末尾の一文がたまらなく好きだ。

『国史大辞典予約者芳名録』は、歴史に名を刻む著名人だけでなく、日本列島の隅々に住まう向学心に燃える市井の人々が、一冊の書籍によって結びついている、その茫漠とした相貌を、一人ひとり個別の見える顔として提示してくれる魔法の杖でもあった (p230)

それほど分厚くはない本だが、読書中ふと、読み始めてから予想以上に長く時間が経っていることに気付いた。一つ一つのエピソードに思いを馳せ、その余韻に浸っていたためであろう。読み飛ばさず、各「芳名」と向き合いながら、ゆっくり読み進めてほしい一冊である。あの日新聞に見つけた目立たないほど小さな広告に、感謝したい。